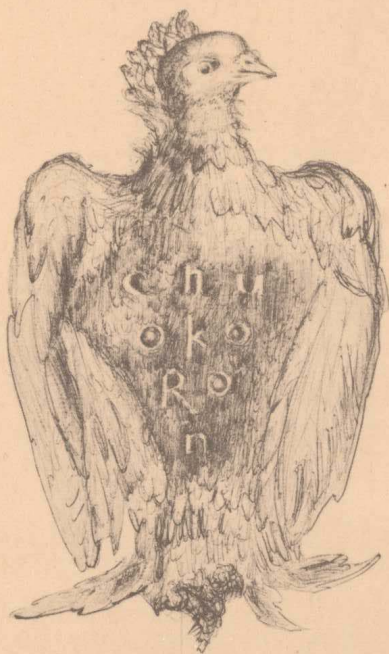




女が外に出るとき

犬養道子著

中央公論社

女が外に出るとき

中公文庫

©1976

昭和五十一年一月十日初版
昭和五十一年二月二十日再版

著者 犬養道子

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二丁目一番地

振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

女が外に出るとき

犬養道子著

まえがき

今から七、八年も前に、雑誌『暮しの設計』に連載し一冊にまとめたものを、また新しく版にしてほしいと中央公論社からの申し出があった。

このごろの七、八年の変化は、かつての二十年三十年にも匹敵し、万事万端、めまぐるしくさまざまなテンポで移り変わる。その変化の波は、日本においてどこの国よりも早く大きく打ちよせるのである。二歩退いて一歩前進、動く前にあわてずさががずまずゆっくりと考えめぐらすといった風のヨーロッパに居をかまえて二年あまり、最近ちよつと日本に帰ってみて、私はそのことを痛いほどに感じたのであった。

だが、同時に、七、八年前とくらべ物価も、衣食住の様相も、すべて大きく変った日本も、一皮剥いでみれば、日々の暮しの底を、目に見えず流れる発想法の面において、実は、七、八年前と大して変っていないことも、また感じとられたのであった。役所や政府の物の考え方、一般の人々の「暮し」に対する根本的な物の見方などは、世相の表面における激変とはさして関係を持

たぬかのごとく、相変らずであるように私には受けとられた。

逆説だが、衣食住の表面で十年前と大した変化を見せない、また、見せようとしないヨーロッパの「保守的な」国々の方が、目には見えない底流の中で、時勢というものを受けとめ必要な変化を行いつつあるように思われる……。

日本が発想法においてさして変っていないといういわば発見が、私に、この本の新訂発行の申し出を承諾させた理由であった。

個々の具体的な事実としては、ここ七、八年の間に大きく変ったものが多い。たとえば、ゴミ収集法や汲取の券の問題。あるいは小切手制度の普及や、印鑑なし署名方法によるクレジット・カードの制度など。

それらの変化を知りつつも、なお、あえて古いままの草稿に、注をつけ、当時の統計や物価や数字を現在の統計、物価数字に改めただけで新版にしたのは、やはり今しがた述べたように、根本において「暮しとは何か」への態度が当時も今も、大して変っていないからに他ならない。汲取の券はなくていいようになって、汲取そのものが水洗普及によって少なくなっても、こんどは「券なしだからなかなか取りに來ない」とか「下水処理場がまだ出來ない」とかの問題にすりかわる。つまり、何が先で、何があとなのか、生活の進歩変化というものにとって一番先に考えねばならないのは末梢か最基本のものか——そのへんのところは、相も変らず混同されているのである。

印鑑なし署名式が多くあらわれて、クレジット・カードや小切手帳も便利になったといい条、私のような外国居住者が納税代理人を日本に置こうとしても、あるいは外国での居住地の銀行発行の小切手を日本で切ろうとしても、印鑑なしにことは進まない。パスポートが期限切れになり再発行願を出さねばならないとあればまず必要なのは印鑑である。日本国政府じきじきの発行による身分証明書すなわちパスポートでは「証明」にならず、駅前の三文判店でも買える印鑑でなければ「本人証明」にならない……こんな発想法も、依然として居すわっているのである。ここにもまた、何が一番だいじなのか、何が末梢事なのか、何が区別されない混乱があるのである。

混乱といえ……

さすがに気づいて○×式教育はだんだん斥けられるようになった——とくに私立の学校において。が、○×式で育てられ教えられた、ひとつの世代は現に存在している。

いいかえれば、○×式全盛であった時代の悲しむべき結果が、いまになってあらわれはじめているのである。○か×か、白か黒か。自分の頭でものごとをじっくり考えめぐらす前に、まず、世間というものがさし出してくれるスローガンや時の勢いや流行を○とし、そういうスローガンや流行にさからうことを×とする、といった安易な発想法が、すっかり身につけてしまったひとつの世代がある。

左派とか右派とか保守派とかには関係なく、どの立場であろうと、○×式にしか物を見ることの出来ない世代が、日本のいまとこんごの中堅層を形づくろうとしているのである。それはこん

この日本にとって、由々しい大問題ではなからうか。

そのへんのことを読者と共に、もういちど考えてみたい理由から、「○×式——この不親切な教育」の項も、古いままの形でのこした。書いた当時は、単に「不親切な教育」と思われた○×式が、いまとなって見れば、「混乱を形成する教育」であつたと言いつてもよいようにさえ思われる。○×で点をとることがだいたいじなのか、ひとりひとりが個々の頭で考えめぐらし、「あらかじめ用意されて」いない真空の白紙の中から、「自分の答」をみつけ出すこと——すなわち思考力——が大切なのか、その判断なしに行われた教育法だったからである。そして、人生という試験物において、「点をとろう、とらせよう」至上主義の教育態度は、今日もまだ、日本の社会に居すわっているのではないか。

要約すると、私がこの本の中で言いたかつたこと、読者と共に考えたかつたことは、二つしかない。

そしてその二つこそ、暮し——日本人のいまとこんごの暮しの設計の上で最も大切な、というよりそれだけが大切なものなのだという私の考えは、十年前も今日も、不変なのである。

その二つとは——ひとつは、社会という連帯の共同体の中における個々の問題。つまり、みんなが使いみんなが利し利されねばならない日々卑近の根本事をどうするか、という問題。ここに汲取や印鑑の問題が入って来る。また、連帯の共同体の人間関係の問題も、礼儀やマナーズの形

のもとに、あるいは行動の自由の形のもとに、入って来る。洗濯機なその共同使用の問題も入って来る。

「時代が新しくなったから」「合理的に、新しい角度で生活を考えなければならぬ」のではなくて、むしろ社会とは実はわれわれひとりひとりの集合体であればこそ、その共同集合体が出来ただけ公平に、むりなく動く——つまりは暮す——ためにはどうしたらよいかを考えねばならないのだと私は思う。日本というこの国の、富の状態（GNPでない一般個々の家族の富の状態）や、住の条件や、特殊な気候や風土をも総括して考えたとき、その国土の上に生きる共同集合体の暮し方には、当然、他の国々に生きる集合体の暮し方とはちがう要素が入って来るはずであると同時に、いつでもどこでも、人間関係を成立させるために不変かつ必要な、すなわち「日本」という枠をはみ出した普遍的な要素も忘れられてはならない。

が、集合体が集合体となるためには、まず、集合する個々が、ちゃんとした個々でなければならぬ。スローガンなぞに易々と流されてしまうような、だらしのない個々では困るのである。個の確立——「考える個人」の確立——それが、日本人、いや人間の暮しの設計の、第二のポイントなのである。

出来るだけ身近な例をとりあげつつ、この二つのポイントを突くことによって、だれのものでもない私の、私たちの、いまとこんごの生活を、少しでもよいものにしたい、少くともよい方向に向うための問題提起としてみたいというのが、この本を書き、いままた中央公論社の御厚意を受

けて装をあらため刊行する私の気持なのである。

一九七二年五月

栗と林檎の花咲くドイツにて

犬養道子

目次

まえがき	3
女が外に出るとき	13
ひとりと一台	47
整理の整理	68
暮しのあした	88
手つだいと肩がわり	108
社会人の基礎・しつけ	132
ケンと犬と人	154
外国人とのつきあい	177
○×式——この不親切な教育	204
「日本」をもういちど	226

解説

上坂冬子

247

女が外に出るとき

女が外に出るとき

I

ある時、私はひとりで住んでいた。厳密に言えば、白い犬一匹と一緒にひとり暮しである。

なぜ、ある時と限定がつくのか、それはあとで説明する。と言うよりはむしろ、私のひとり暮らしが限定づきの過去完了に終わったそのこと自体が、この原稿のテーマなのである。

私は一戸を構えていた。父母の家の二階につくられた一戸ではあったけれども、完全分離完全独立の一戸で、入口ももちろん別、台所、風呂場は言うにおよばず、水道、電気、ガスのメーター一切もまた別であった。

父母には父母の生活がある。父母が年を取って、精神的実地的な援助や、私がそばにいること自体を望むなら、私はそれに喜んで応じるが、すでに成人し職業を持った私の側から、進んで彼らの生活領域に入りこみ、いかなる些細なことがらについてであっても、救いを期待してかかることは正しくないと思ったからである。生活が保証された成人の住まい方は、すべからず完全自

治であれ、というのが、私の信条であり、また九年たつぶりの海外生活によって私が学んだ教訓でもあったのである。

さて、人々は、私が完全自治のひとり暮らしをはじめると聞いて、こんなことを言った。「あなたのような、ジャーナリズム関係の不規則な仕事を持っていては、犬一匹とのひとり暮らしはとてもとても大変だ。長つづきはしませんよ。原稿書き、取材旅行、時間なしの仕事、掃除、料理……両立しませんよ」

ところが、この人たちの案じてくれたその意味においては、私のひとり暮らしはけっこううまく行ったのである。私は上手下手は別として、料理が好きである。美しくみずみずしい野菜を切ったり、刻んだり、肉を叩いたり丸めたり、オーブンの熱加減をしらべたり、ビسケットを焼いたりするのは大好きで、そういうことをしながら、原稿のすじを考えもすれば、きれいさっぱり忘れて、ひたすら料理を楽しみもする。買出しも好きである。週一度、犬と一緒にスーパーマーケットに行つて七日分の買物をし、冷蔵庫にきちんと入れて貯える。私にとって、冷蔵庫は「冷やす」ものではない。「貯蔵するもの」である。だから、ひとり暮らしでも大型を使う。したがって、毎日買物のための外出の要はない。

壁を、アメリカ時代カレッジ生活のころと同じく、洗ったり塗ったり、床を油でみがいたりするの私の趣味に合う。座敷飼いの犬は賢くおとなしく、ちゃんと留守番をしてくれるから、(ただし留守中の電話の取次ぎはきらいとみえて一度もしたことはない)空巢の心配もなかった。

私は自宅が仕事場である書きものに、最低限の邪魔しか入れたくなかったから、入口には「御用聞き一切おことわり」と大書し、クリーニング屋さんだけを例外に、ただし、それも毎週×曜の午前中を限つての木戸御免とした。客との面接日もきめた。留守の多い生活だから、集金人がムダ足をふむ可能性も多く、それでは気の毒なので、新聞の支払い日は月の最後の日。それが日曜に当たるときはその前日、とも話をつけた。そのほか、突発の用があつて来る人のためには、連絡箱という箱を入口において、そこにメモをのこしてもらうようにも手はずをととのえた。

これだけの手を打てば、ひとり暮らしはうまく行く、永久に、私の生きる限りうまく続く、と、私はおろかにも考え、うれしくなつて、パートナーである犬を相手にイタリアン・ベルモットで祝盃をあげた。「これだけの手」は、九年を送つたヨーロッパ、アメリカの生活を回顧して、「ひとり暮らし」のための条件をあれこれ数えあげた結果の「手」だったのである。

ところが、

ああ、ところが、である。

ひとり暮らし一週間目、早くも私は大変な誤算に気がついた。

誤算の第一はゴミの問題であつた。当時は今とちがい、東京都には定時制収集というルールはなかった。チリンチリンと鐘を鳴らしてゴミ集めをして廻るその車は、いったい、いつ来るのか、皆目わからないのである。午前中来るということはわかつてゐるのだが、どの日のどの時間かわ